

## 児童が異質な集団で交流できる能力を育むための研究 ～児童同士の関係作りとチームの協働性を中心に～

佟 韜慧（長崎大学大学院）

楠山 研（長崎大学教育学研究科）

呉屋 博（長崎大学教育学研究科）

### 一. 研究背景

近年の社会情勢の中、子どもたちが多様な集団の中で自らの個性を意識し、自分や他者との違いを認めた上で、協力することの大切さに気づくことが一層重要になると考えている。筆者が外国育ちの在日外国人という立場で日本の小学校教育に関わってきて、日本の子どもに求めたいと感じたことが3つある。それは、①日本人の小学生同士でも多様性があるということへの気づき、②他人を尊重しながらの関係作りの必要性、③チームでの協働の重要性である。よって、多様性がある集団の中で働くために、まず自分と他人の特徴を素早く分析し、有効な働き方を考える力を育む必要があると感じ、本研究を構想した。

私の気づきを理論的に示すものとして、次の2つをあげておく。1つはPISA（生徒の学習到達度調査）を実施している経済協力開発機構（OECD）が提案した“キー・コンピテンシー”である。この中に、人生の成功と正常に機能する社会のために必要な能力の中の1つとして、「異質な集団で交流する能力」があげられている。様々な経歴をもった人と出会う可能性が増した現代社会においては、異質な集団であっても人と交流できるようになることが重要である。これからのグローバル化社会に適応するためには、いろいろな背景や経歴を持つ人と付き合う機会が増えてくる。よって、多様性がある社会で生きていく力を育むことが不可欠になる。たくさんの人の集団の中で働く際にうまく交流するために、人間関係作りとチームでの協働性が非常に重要となる。集団の中で自分はどのような働きができるのか、他の人とどう関わって課題を完成するのか。集団のメンバーで役割を分担して、それぞれの力を発揮し、一番効果的に協力することが必要になる。

もう1つは、平成25年に閣議決定された『第2期教育振興基本計画』である。本計画の中の、これからの日本の教育行政の4つの方向性の1つとして、“絆づくりと活力あるコミュニティの形成”があげられている。その中の“人のつながりや支えあいの重要性”の項目には“多様化する家庭が様々な課題を抱え孤立しがちな社会状況や、生活の有りようが変化し生活の中で自然に行われる教育的な営みが難しくなっている状況を踏まえ、多様な主体や世代が関わりあう社会を実現し、子どもの育ちや子育て家庭を支える人間関係とシステムを持つ地域づくりが求められている。”ことをあげている。つまり、社会の状況は迅速に変化しており、その社会はたくさんのコミュニティ（集団）からなっている。変化に伴って課題も増えてくる。個々人にどんな課題であっても解決できる能力を育む必要がある。しかし問題解決

は個人だけでできることではなく、集団で一緒に考え、集団の力を合わせていかなければならない。多様性がある社会の中で集団の人と交流するポイントはお互いのつながり、つまり絆作りである。筆者は多様な問題がある時、個人のアイデア、一人一人の力を合わせて働くことができるコミュニティこそが、持続可能で活力ある集団であると理解している。これらを踏まえて、授業実践として具体化していったのが本研究である。

## 二. 研究目的

本研究には以下のような三つの目的がある。

①児童が自分の集団の中にも異質さがあることに気付く。

ここで述べている異質さとは、児童1人1人の一番単純な違いということである。「異質」は英語の heterogeneous を訳したものである。この英単語の意味を辞書で引くと「異質の、異種の、混成の、不均質の、雑多の」(岩波英和大辞典, 岩波書店 1970) と書かれている。本研究ではこの言葉の“異なる, 雑多”という意味に焦点をあてている。日本社会は一般的に同一性が強いように語られることが多いが、そもそも、太古の昔から世界から移民が集まってきて、長年かけてできた国であり、たくさんの民族を祖先としている。さらに現在は、国際結婚が激増し、その他背景の異なる人々が集まってくるなど、グローバルな社会が形成されつつある。これを児童集団の話につなげてみると、それぞれの児童の家庭や成長環境はかなり異なっており、個性、生活習慣、好き嫌いなども当然異なる。そして、集団の中の一人として働く時、この異質さがあることにしっかりと気づき、それを意識しつつ活動することが重要であるといえよう。

こうした目的を設定した理由は、次のような児童の様子を見てきたからである。例えば皆が一緒に活動する時、自分のやり方や考え方と違うことをしようとする児童に対して、他の児童がそれを理解しようとしめないケースである。その場合、児童はそうした違いが生じる要因を、それぞれに違いがあるから、と考えることはほとんどなく、“違うことをしている人の考えがおかしい”, “なぜ皆と違うことをするのか”といった思いを持っている。そこには、その児童1人が「変」であり、他の全員は自分と同じ、という意識が透けて見える。よって、“皆がそれぞれ違う”という観点を持たせる必要があると考えている。

②児童自身の個性や特徴を互いに認めた上で、集団で交流する必要性に気付く。

児童がそれぞれの異質さに気づくようになると、当然1人1人に長所と短所があることに気づくようになるであろう。実習中、児童にアンケートを取った際、自分の長所が見つからない児童が少なくないことが気になった。また、チームを作って活動する際、児童が誰とチームを組むかについてとても気にするという様子もよくみられた。児童は、自分の友達と同じチームになれることを望み、苦手な人と同じチームにならないことを願う。チームになってからどうやって協力していくかを考える前に、誰とチームを組むのかを気にするのは、児童それぞれの良さに気づいていないのが原因ではないかと考えている。よって、児童に誰に対してもその人なりの良さがきっとあるという思いを持たせ、苦手といった先入観を作らず、相手の良さを見つけようという積極的な考えを持たせることがこの目的である。そして、集

団で活動する時、黙って指示を待つより、チームメンバーが互いに交流することが成功の第一歩ということに気付かせることも目指していく。

③児童同士の違いを認識した上で、相手を尊重しながら交流し、良好な関係を築き、チームで協働できるようになる。

本研究における“異質な集団”というのは、そもそも人が複数集まった集団であるならば、それは異質な人々の集まりである、ということ为前提としている。この目的は①②の二つの目的に到達してから考えることができる、本研究の最終目的である。1人1人に違いがあり、それぞれの得意、苦手があることを理解し、課題があればチームメンバーと交流し、補い合いながら分担して仕事ができる。その過程で問題が発生すれば、再びコミュニケーションを取って、問題を解決していく。

このような流れをつかむことができれば、それは学校での課題を解決する場面だけでなく、日常生活においても活用することができるようになるのではないだろうか。つまり、異質な集団で交流する能力を身につけ、それを他のあらゆる場面で使えるようになることが本研究の最終目標である。

### 三. 研究方法

本研究は、大きく三つの部分に分けて進めていった。

#### ① 児童の実態観察と事前調査

クラス全体の雰囲気、児童の異質さへの気付き、集団の中の協力性などを中心に観察した。事前調査アンケートは児童の中の考えをはかるという目的で、異質な集団への気付き、集団の中に協力することへの意識、及び自分と他者との違いについての3つの質問を設定した。

#### ② 実践授業

実践授業は外国語活動の時間とし、日本の子どもが大好きなカルタゲームの英語バージョンを作って、児童が外国人と一緒にカルタゲームを遊ぶ活動を取り入れた。この活動の中で、日本の児童が外国人に日本の伝統的なゲームについて教え、それをもとに外国人同士がカルタゲームで対戦することになる。

教材は、小学校外国語活動の補助教材『Hi, friends! 2』Lesson 2の「月の英語の言い方」とした。まず、JanuaryからDecemberまで各月を表す絵カードを作る。絵の内容は、それぞれの月についての行事や祭り、季節などを児童同士で出し合った上で描かせた。

本活動では、児童をチーム（各班3人）に分け、各チームに外国人ゲスト1人が入る方法をとった。活動は作戦タイムとゲームタイムに分けた。作戦タイムでは、チームの児童が外国人にカルタゲームのルールを説明するとともに、各カードの絵が何月を表すかを説明する。英語の単語がわからない場合は、ジェスチャーを使ったり、先生に聞いたり、どんな方法をとってもよいこととした。

ゲームタイムには、各チームの外国人ゲストのみがカルタゲームに参加する。取ったカードの枚数はそのチームの点数になる。この流れを3回繰り返し、その都度ゲストは入れ替わることとした。よって、児童は毎回、違うゲストに説明することになる。

本活動を設定したポイントについて、いくつか述べておく。まず、カルタゲームにした理由は、児童が楽しむことができ、慣れ親しんでいる伝統的なゲームだからである。カルタの絵を描く際には、自らの文化の伝統や習慣に改めて気付くことになる。チームを分けたのは、チームとして協力することの大切さに気付かせるためである。同じ目標に向かって、それぞれの得意な点を出し合い、欠点を補い合って、最終的な勝利を目指すことで、さまざまな気付きがあると考えた。

外国人と交流する活動にした理由は、いくつかある。まず授業では児童が外国人ゲストに何かを伝えなければならない場面を設定しようと考えた。児童はカルタゲームに書かれている内容が何月を表すのか、その絵の意味は何なのかを知っているが、その月の英語の言い方に慣れていない。逆に外国人ゲストは、そのカードを見ても、その行事や物が何を意味しているのかがすぐわかるものは少なく、またそれが何月の様子であるのかもほとんどわからない。よってお互いが協力しながら解決していく必要がある。

また、人と交流する際に、言葉や国や習慣は大きな問題ではなく、交流しようという意欲が一番重要だということに気付かせるためである。また本研究の目的に関連して、まず外国人と自分たちとの明確な違いに気付いてほしいということも含んでいる。外国人ゲストと交流してみて、外国人との違いに気付く。そして外国人ゲストをゲームの度に入れ替えることによって、それぞれのゲストによっても違いがあることに気付く。そのことが最終的な目標である、自分たち児童の中にも違いがあることに気付くための第一歩となると考えたからである。

活動が終わった後には、ゲストとともに活動を振り返る時間を設けた。児童と外国人がこの活動を通して気付いたこと、分かったことを共有し、本研究の目的に関わる児童自身の気付きを明確にするためである。

### ③ 児童の事後調査と評価

事後調査は事前調査と全く同じ項目のアンケートを取った。事前調査の後、この活動が終わるまでの一ヶ月以上の期間で、児童の異質な集団と協力についての考えが変わるかどうかを調べるためである。そして、事後アンケートには、外国人と活動する前と後の気持ちの変化についての質問を加え、児童の気付きや感想を詳しく書いてもらうことにした。

評価については、事前調査と事後調査を利用して児童の意識変化をみるとともに、実習中の児童観察、担任教員や児童をよく知っている教員へのインタビュー、実践授業のビデオ、毎回授業をした後に児童が書いた振り返りシートの情報を総合して行った。

## 四. 授業実践

### 1. Y小学校第6学年での実践

Y小学校6学年は児童が全部で15名と少人数である。女子4名、男子11名であり、男女の割合も偏っている。実施時期は2014年9月1日～11月19日であり、基本的に毎週2回小学校に通って実施した。

事前調査として本学級の児童に外国人に対する印象、初対面の人とチームで協力すること、

人と人との違いへの気付きに関するアンケートを取った。この結果では、半分以上の児童が外国人や初対面の人との交流に不安を持っていた。自分たちの中に違いがあることに気付いている児童は5割ぐらいであった。こうした点を踏まえて、他人（特に初対面の人）と違いがあることに気付き、チームで協力して働くこと、行動することの良さを実感できるようにしたいと考えた。

○ 授業実践の概要

Y小学校での実践は、事前アンケート調査、実践授業、事後アンケート調査の流れで行った。（Y小学校の実践授業で使った事前・事後アンケートの質問紙（資料1）と追加アンケート（資料2）を添付する。）

Y小学校では「英語カルタゲームを通じた、異質な集団におけるチームの協働性作り」という5時間の単元を考えて、実際に授業を行った。1時間目から3時間目の授業は児童が英語カルタゲームを体験してみる、外国人とカルタゲームをすることを児童に知らせる、児童が自分で各月を表す絵を考えてカルタカードの絵を描く（図1）、外国人ゲストの自己紹介ビデオを鑑賞してもらう、具体的にカルタの絵はどう説明するかを話し合う、という流れで行った。4時間目の授業は外国人ゲストと実際に活動をする時間である。5人の外国人ゲストにクラスに来てもらい、児童と一緒に英語カルタゲーム大会をした。5時間目の授業は前の時間と連続しており、本単元の活動全体を通して、ゲストが気付いたこと。また、児童の感想を出し合って交流する授業である。



(図1-1)



(図 1-2)

## 2. 結果

1 時間目の授業では児童だけでカルタゲームをした。児童は楽しんでいる様子であったが、自分たちで書いた絵ではないため、内容が一部わかりにくい様子がみられた。また、2 時間目と 3 時間目には、児童が教員の意図を読み取れず、積極的に準備する姿が足りない様子があった。どうしたら良いのか、先生の意図はなんなのかについては疑問があるみたい。しかし、4 時間目に外国人とゲームをする際には、最初こそ戸惑った状態がみられたものの、段々盛り上がり、全員が積極的に話す様子がみられた。5 時間目の話し合いでは、普段あまり話そうとしない児童が積極的に意見を述べる場面がみられた。

## 五. 考察

### 1. 授業実態から分かったこと

実施した授業のビデオを見ると、普段あまり発言しない児童が意外と授業中に何回も発言する様子がみられた。学校の教員に児童の変化についてインタビューをした際、担任教員が“意外なメンバー”が今回の活動で活躍していたことを指摘していた。

今回の授業内容は理科や算数のような正しい結果がある内容と違って、児童の表現力、想像力やコミュニケーション力とつながるものである。普段の授業では、算数が速い、暗記することが得意など、児童同士で誰ができるかお互いに把握している。しかし今回の授業は、まだ誰もが学び始めたばかりで完璧にマスターしている児童のいない英語を主に使うものである。そのため、本授業では、児童の今まで見られていなかった潜在的な力を引き出すことができたと考えている。英語で普通に喋る、ICT の活用、先生の意外な発問に答えるなど、普段の授業で見られない力が試されており、それが見えるようになったということができよう。

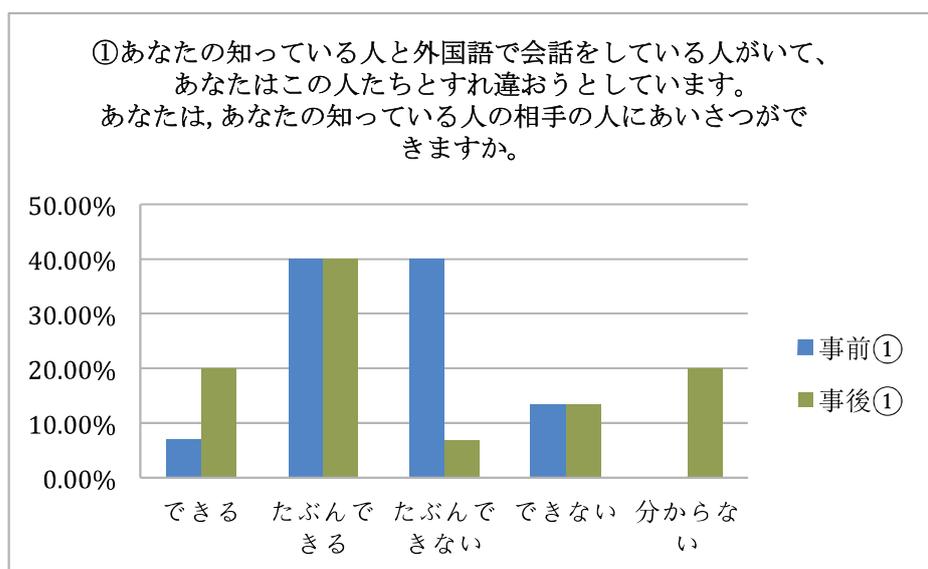
また、いつもは勉強がよくできる児童が英語での説明に苦戦している様子を見て、自分も頑張ってみようという勇気や意欲が出てきた可能性もある。

次に、普段の授業や学級生活の中で活発な児童が、今回の活動では目立った活躍がみられなかった児童のケースについて検討してみることにする。

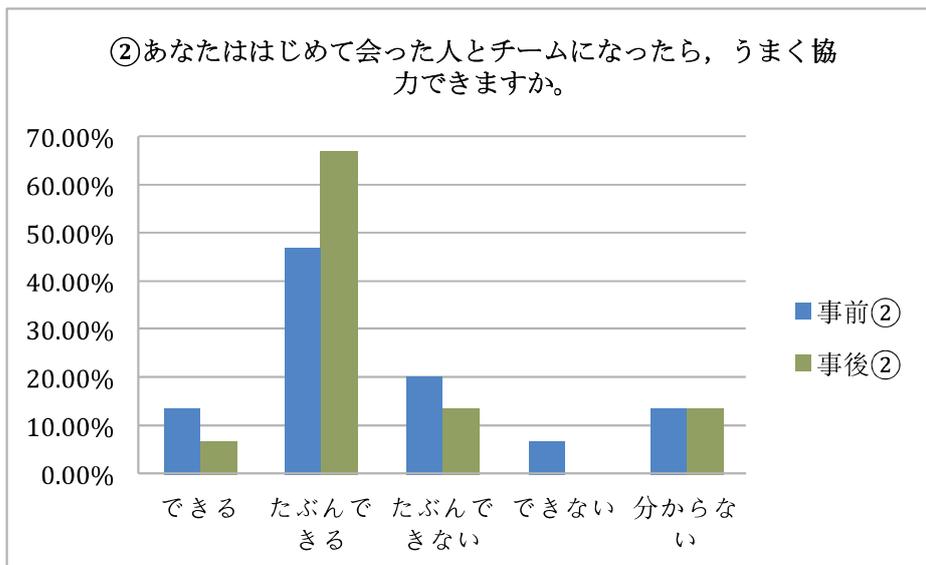
ある女子児童はクラスの中心的人物の1人である。いつも活発に学級活動に参加し、スポーツや勉強などあらゆる面で積極的である。しかし、今回の授業全体を通して、授業中の発言はあまり多くなかった。授業後の感想シートには、“カルタをして楽しかった！”“外国人とカルタ大会をすることは楽しみにしている”といったことが書かれており、授業観察においても、楽しそうな表情や行動が見られていた。また彼女の親友であり、いつも一緒に行動している女子児童も、同じく活発な性格で、みんなと仲の良い人気のある児童である。しかし、今回の授業ではやはり、授業中の発言が少なかった。活動中においては、カルタの絵を描く、外国人と活動をした時、自分から説明する、同じチームの人が説明した時、アドバイスをするなどの様子は見られており、活動後も、“楽しかった”“よかった”という感想を書いている。

この2名について、活動は楽しんでこなしながら、授業中の発言が少なかった理由については以下のように考えている。こうした児童は普段から指導者の話を良く聞いて、しっかり理解してから動く習慣がある。教師の意図や活動の趣旨を正確に読み取ってから行動するタイプである。しかし今回の活動は、普段とは異なる授業展開であり、普段慣れている教員ではなく、また説明も多かったため、十分にその意図を読み取ることができなかった。つまり、その慎重さが行動を鈍らせてしまったと考えられる。2人とも活動自体は活発におこなっていたので、教員の説明をわかりやすくし、声掛けを工夫すれば、こうした児童からも発言が出てきたのではないかと考えている。

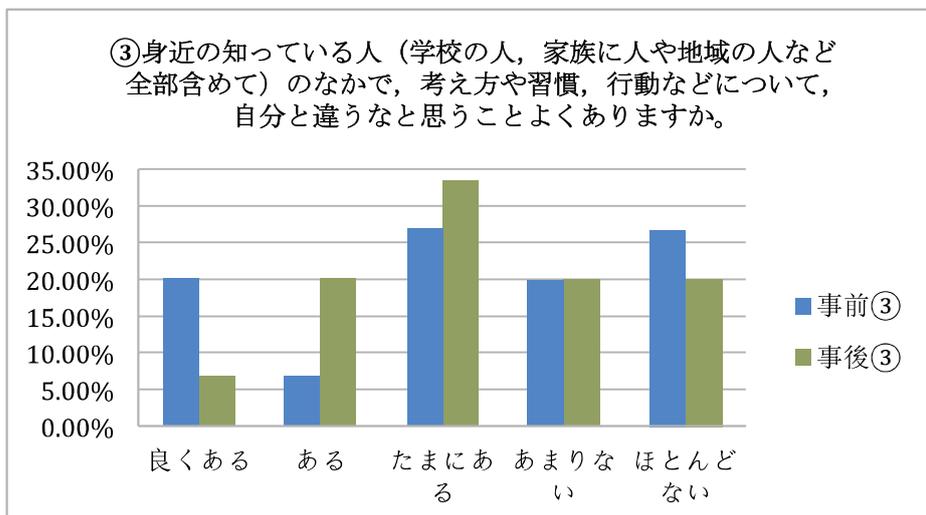
最後に、アンケートの結果が変化している理由を分析してみる。(事前・事後アンケートの結果比較グラフは図2、児童回答比較は表1)



(図 2-1)



(図 2-2)



(図 2-3)

Y 小学校事前・事後アンケート結果の比較

坂本小事前、事後アンケート比較表						
児童代表記号	①	その理由は	②	その理由は	③	その理由は
A	イ	外国語でする挨拶は、簡単なしか分からないし、少し分からないのがあるから	イ	相手に合わせれば、ふつうに何でもできるから	ウ	「こうだ!」と思っていたのが、全部否定されることが良くあるから
A	イ	知らない人にもあいさつできるからできると思うけど、外国人だから英語で言わなきゃちょっと恥ずかしい。	イ	知らない人だから、ちょっとえんりょうしてしまうけど、仲良くなれると思ったからです。	イ	意見を言う時、1人だけ分かる時良くあるし、みんなからおかしいって言われるからです。
B	ア	ハローでいったらすつきりするから	オ	その人がどんな人か分からないから	ア	X公園に時々いる。
B	ア	だってハローでいったらそっちのほうもハローって、いってくるからぜんぜんできる。	イ	なんかあまりできそうじゃないので、たぶんできるにしました。	ウ	たまにそう思ったりすることがあるから、こんなふうになりました。
C	イ	初めてなので、少し不安な気持ちに成る	イ	あまり知らない人とチームに成るのは不安だけど慣れるとできそう	オ	こういうのは考えたことないからあまり分からない
C	ウ	初めて会う人だと、何語か分からないから	イ	すぐになれそうだから	オ	思ったことがないから
D	イ	できそうな気がするから	ア	ちゃんと仲良くなれるから	オ	全然そんなの感じたことがないから
D	イ	ハローぐらいはいえるし、ちょっとした質問できるから。	イ	すぐに友達になれるしなったらなつたのできるから。	オ	よく話すけどそう思ったことはないから。
E	ウ	あまり英語を知らないから、でも知り合いの友達だから	ウ	僕は人見知りか激しいから	ウ	勉強する時間とか違うなと思うことがたまにあるから
E	エ	こんかいやったカルタゲームで自分はまったく英語を話さないと分かったから。	ウ	自分は激しい人見知りだから。	ウ	ときどきちがうな自分と～君は、と思ったりするから。
F	エ	外国語が得意じゃないから	エ	はじめてあった人だからあまり分からないから	イ	なし
F	イ	日本語が相手に伝わればあいさつできる	オ	やってみないと分からないから	エ	だいたい考え方が似ている人が多いから
G	ウ	外国語でできるとこもあるけれど、答えきれないとこの方が多いから	イ	作戦のときにちゃんと教えればいいから	ウ	家族とたまに行動などが違うから
G	ア	あいての知っている人だから	イ	はずかしいけど、どんどん、ともだちになれそうだから。	ウ	すこしちがうところがあるから。
H	ウ	なぜなら、「ハロー」とか言えるけど他の言葉は言ったりするのが難しいから	イ	言葉を言わなくてもいいならできると思います	オ	皆の考え方などを見たりしていないから
H	イ	道とかを聞かれると分からなくなるから。	イ	その人の気分や見ためによつてかえます	エ	人はだいたいはおなじ生活をしているから。
I	エ	英語がわからないから	ウ	あまり知らない人だから楽しくできない	エ	あまり一緒に行動をしないから
I	オ	じゃましたら、ダメなのかなと思うから	イ	知らない人同士だから、名前とかを聞きながらできるから。	オ	みんな、同じような人だから。
J	ウ	知っている人と外国語で会話をしている人がいたら、まず、外国語ができるか心配だから多分いいかなと思う	ウ	知らない人とは、ちょっと離れてこないと全然しゃべれないし、行動が合わせれないと思う	エ	なぜなら、考えてることが時々同じになることがあるから
J	エ	まず、知っているひとをみてそのひとなら少はいさつした方がいいかなあとおもうけど、相手の人はまず、しらないほうがいいとおもわない。	ウ	まず、しらないひととは、しゃべれないし、しーんとしたふいんきでおおるとおもう。	エ	そのひとのこうどうに、私があわせたりなんかいろいろあるし、気が合うから。
K	ウ	外国語がしゃべれないから	イ	何かを楽しみだと言うことを伝えるとその人たちも協力してくれると思うから	エ	皆と同じようにしているから
K	イ	あいさつをしないとどんな人かわからないから	イ	協力しあうと思えばうまくいくから	ウ	計算のじゅんばんとかがばらばらになったときがあるから
L	イ	英語で「こんにちは」といってすれ違うから	ア	初めてあった人でもチームに慣れは自然と仲良く慣れるから	ア	人と考え方が違うのは良くあることだから
L	イ	英語がわからなくても【ハロー】と英顔で言えばいいから。	ア	はじめて会っても、なれるとすぐ友達になれるから	ア	自分がこう思っても、姉は「そんなわけない」と言ってくるから
M	イ	挨拶ぐらいはできるから	イ	その人に合わせればいい	ア	みんな心も体も違うから
M	オ	はずかしくて、できないかもしれない。まちがったことをいってしまうかもしれない	イ	日本人がいたらあんしんする	イ	みんなかおとかからだとかこころとかちがうからです。
N	イ	外国語は、あんまり分からないけど、挨拶とか名前を言うことぐらいはできると思うから	イ	知らない人だったら、あんまりしゃべったりしないで、できないけど、もし、自分の好きな物をする時は協力できそうだから	ウ	友達とかは、私が今楽しーって思ったとき、楽しくないってたりするから
N	ア	あいさつとか自己しょうかいとかならできるから。	イ	③とっしょに、あいさつとかができるから。英単語を使えば何とかなりそうだから。	イ	私は、本を好きでよんでるけど、周りの人は、ひまつぶしでよんでる人がいるから、私と周りの人は違うなあとと思います。
O	ウ	自分から話そうとしないから	オ	そのときによつて違うから	オ	自分と他の人との違いを考えようとは思わないから
O	オ	知っている、自分から話そうとしないから、とくに外国語では。	オ	初めてあった人とはあまりしゃべれないから。	ウ	自分と違う気がするから。

注: 有意な変化がある所  
 変化がある所  
 同じアルファベットを表示するのは、上の欄は事前調査の結果、下の欄は事後調査の結果

(表1)

質問①「あなたの知っている人と外国語で会話をしている人がいて、あなたはこの人たちとすれ違おうとしています。あなたは、あなたの知っている人の相手の人にあいさつができますか。」が“できない”から“たぶんできる”に変化したある児童は、事前調査の際、外国人とあいさつするなら絶対英語が必要なので、自分は英語が苦手だからできないと考えていた。今回の活動を通して、ジェスチャーや体の表現、表情、また日本語を使うなどいろいろな工夫によって、自分が言いたいことが外国人に伝わる経験をしたため、事後調査において、“日本語で伝わるから”、“あいさつしないとどんな人が分からない”などの考え方に変わったと考えている。

“できる”と思っていたが、事後に“できない”，という方向に変化したケースもあった。これについては、事前調査の時点では、日常の場面で実際に外国人と会って話したことがなかったため、授業で学んだ英語を使ってあいさつぐらいできると思っていたが、実際に外国人と話してみると、自分の英語が思ったよりも言葉が出てこない、伝わらないことに気付いた可能性がある。

質問②「あなたは初めてあった人とチームになったら、うまく協力できますか。」では、事前と事後調査の結果にあまり差はみられなかったが、その理由には変化がみられた。例えば、事前調査で“できる”と思う理由として、“相手に合わせておけば、普通になんでもできるから”としていた児童が、事後調査では“知らない人だから、ちょっと遠慮してしまうけど、仲良く慣れると思ったからです”という答えに変化していた。これについては、想像の域を出ないが、初対面の人とチームになって上手く協力できることについての理解の点で、活動後に児童の中に変化があったのではないだろうか。事前調査では、初対面の人とチームになっても、一方的に相手に合わせて、相手が言うやり方に従っておけばそれで問題ないと考えていた。しかし活動の中では、単に相手に合わせるということがうまくいかず、お互いの意思疎通を行い、友達としてお互いの良さや特徴を理解するなどの信頼関係を作らなければうまくいかない、という経験をした可能性がある。その結果、本実践研究の目的である、チームで良い関係を作りながら協力するという気付きに至ったのではないかと考えている。

質問③「身近の知っている人の中で、考え方や習慣、行動などについて、自分と違うなと思うこと良くありますか。」は、事前調査では自分と他人との違いについて、“あまり考えたことがない”という答えがほとんどであった。しかし外国人と活動した際、ゲストが毎回変わったことで、同じ説明でもゲストによって反応が違うこと、理解度が違うことに気付いたようである。また児童同士でも、説明の方法が違い、困った時の対処方法が違うことに気付いてもいた。最後の振り返りの際に、それぞれのチームのやり方の違いについて外国人ゲストに質問をした。そこでは、あるチームは3人一緒に最初から最後まで説明した、あるチームは1人がメインとして説明し、残りの2人はアドバイスをする役割をしていたなどのチームによる違いが語られた。こうしたことから、児童が自分なりに活動の経験を振り返り、細かい場面を意識した記述がみられるようになったのではないかと考えている。

続いて、担任教員等が活動が順調に進むかどうか不安に思っていたところ、実際には思っていたよりも活動がスムーズに進んだ要因について考えてみることにする。

いつもの学級で同じメンバーと同じ活動をする時、教員は児童の特徴や苦手なことを把握している。しかし、今回は普段と異なる活動であったため、児童の普段見られない能力が現れてきたといえるのではないだろうか。カリキュラムや時間等の制約があり、実際に実施することは難しいが、児童にたくさんの機会を与え、たくさんの人や活動と関わるチャンスを与えれば、児童1人1人の意外な面が見えてくる可能性がある。好奇心が強く、7割の児童が初めて外国人と交流するという機会は、そうしたことを示すいいきっかけであったといえよう。

実習全体が終わった後に実施した追加アンケートの結果について考えてみることにする。  
(追加アンケートの結果は表2)

児童の中の変化の調査、外国人とのカルタゲームをしたあと、友達と交流する時に重要だと思ふようになったことを、○をつけて

児童代表番号	①友達と話をする時、友達が言っている言葉の意味をよく考えて聞くこと	②友達と話をする時、友達の表情を良く見ること	③友達と話をする時、友達が自分の言いたいことをちゃんと理解しているかを確認すること	④友達が自分の言いたいことを分からない時、別の言い方で伝え直すこと	⑤友達の言いたいことが分からない場合、もう一回説明してとお願いすること	⑥友達と話をする時、友達の性格や理解できるような話し方を考えてから話すこと	自分の経験やそう思う理由
A							
B	○			○		○	
C	○	○	○		○	○	
D	○	○	○	○	○	○	引越してきたとき、長崎弁がわからなくなってきた。
E	○	○	○	○	○	○	
F			○				
G	○	○	○	○			ちゃんとあいてがわかってい るかをチェック
H	○			○		○	フナッシー
I	○	○	○	○	○	○	
J	○	○	○		○		友達と話すとき、自分が言う ことばをちゃんとつかいで から言う
K	○		○	○			くわしく説明するようになった。 (物を説明すること)
L		○	○	○			友達が自分の言いたいことを 分からないときは、外国人グ ストにちがう言い方で伝え直 したように、友達にも別の言 い方で伝え直すようにしまし た。
M	○	○	○	○	○	○	せいかくがかわったな、てい ねいにせつめいできた
N	○	○	○	○	○	○	友達が、言いたい方を言っ たけど、たまに分からない時 は、何回もきて、説明をし てもらったりしました。③と いっしょです。
O	○						
合計	12	9	11	10	7	8	

(表2)

このアンケートで、児童が人と交流する際に重要だと思ふようになったことは、まさに児童が外国人と交流した時、児童自身が「できていない」課題として気付いた所ではないだろうか。児童が友達と交流する際も、自分が言いたいことや相手が言うことが分からない時、一方的に“この人はおかしい!”と思ってしまうのではなく、相手の表情に注目する、言葉を伝え直す、相手がなぜ分からないのかを考える、“相手が分かるような言い方に直すようになった”という回答は、それを示すものといえるだろう。また相手の話が分からない場合、分からなくても分かるふりをして終わらせず、言い直しを求めるといった回答もみられた。このような変化は、児童が周りの人と違う所に気付いた証拠ともいえよう。“皆日本人だから同じ言葉を使うので、通じないことはない”“外国人だから意味が分からない”といった考えから、お互いが違うから協力しあう、理解しようとする考えに変化した様子がみてとれよう。

次は、集団で活動することの意味について考えてみる。今回の実践授業は1時間目からチームを単位として活動した。ここには、“集団”という意識に児童の中で気付いてほしいという思いを込めていた。カルタゲームをする、カルタの絵を考える、絵を描く、カルタの説明を考える、実際に説明してあげる、最後英語で月を読むなど、全ての活動がそれぞれの力を合わせて完成させたことに気付いてほしいと考えていた。事前調査で“相手に合わせれば何とかなる”と答えていた児童が、事後調査では“相手と友達になってから、どうしたら良いか相談してからできる”という考え方に变化したのは、チームで活動する中でその重要性に気付いたからであると考えている。今回の活動を通して、一方的に相手に合わせることは十分ではなく、チームで働く時、それぞれの個性や特徴を分かってから仕事の役割分担をすることで、うまく進めることができるという気づきも重要であった。

また、集団活動と関連してもう1つ大事なことは、活動の内容の設定である。本実践のような課題解決型の授業設定は、児童自らやる気を促し、課題を解決するために努力しようとする気持ちを引き出しやすく効果があると考えられる。チームでの活動により、1人だけでも十分ではないことに児童自身が気付くことができる。特に今回の課題には大きな特徴がある。それは普段の授業のように、誰か特にできる児童がいて、その児童が1人で頑張れば解決するような課題ではないことである。つまり、児童みんなが英語ができない、カルタの絵を説明することも誰も完璧にはできない。とにかくお互いに助け合わないと完成できない課題である。よって、普段は自分からはあまり話さない児童が、同じチームの児童の説明に困っている様子を見て、自分からアドバイスをするようになるという場面がみられた。この集団活動の中では、どの児童でも自分に相応しい役割を見つけることができている。それにより自分なりの活動ができ、自分なりの成長を実感できていたのではないかと思う。さらに、このように普段とは異なる課題を設定し、集団で課題を解決するような活動は、他の教科や時間にも活用できると考える。

最後は、“異質”というキーワードを使って、本研究が持つ意味について考えてみたい。本実践では、異なる性格の子どもたちでチームを組み、異なる国から来た外国人ゲストと、毎回グループを変えて交流をした。この意図として、わかりやすい違いを用いながら、身近に存在する違いに気付かせたいということがあった。事後調査の時、“友達が自分の言いたいことを分からないときは、外国人ゲストにちがう言い方で伝え直したように、友達にも別の言い方で伝え直すようにしました。”という経験談は、これが伝わった一例といえるであろう。異質という概念を小学校の時に感じていれば、これからの人生で多様な物事、たくさんの人と関わる時、非常に役に立つと考えられる。日本の教育は皆が同じ目標に向かわせる傾向が強く、個々の違いを目に見える形に表すような授業設定はあまりみられない。筆者は、逆に、皆が違うと気付いておくことが重要で、そこから始めて、どうやって補い合い、協力して行動するのかを考えることが大切だと感じている。そうした点で、本実践は意味があったと考えている。

## 六. 成果と課題

### 1. 研究成果

① 児童が自分の集団の中にも異質さがあることに気付く。

この目的についてはほぼ達成できたと考えている。事前調査と事後調査の答えの違いでも、それまでお互いに違いがあるかどうかについて考えたことのなかった児童が、活動を通して同じクラスの人や知り合いの人と考え方が似ているとか、人はだいたい同じ生活をしているとか、また、自分の違う気がするなど、周りの人の行動を意識するようになった様子が確認できた。そして、それまでみんな同じように考えていると思っていた児童が、本を読む時、計算する時などに、考え方の違いなど細かい所まで気付くようになった。これは、一緒に活動した外国人との違いだけではなく、いつも同じ集団にいる友達や家族の人、良く知っている人との違いに気付いており、本研究の目的に沿った変化と言うことができよう。

② 児童自身の個性や特徴を互いに認めた上で、集団で交流する必要性に気付く。

日本の伝統的なゲームと各月を表す日本の行事を説明することは、児童にとって自分の文化や生活を振り返ることになる。つまりこの自分の特徴を考えて、外国人の受け取り方を想像して説明することは、まさに自らの個性や特徴を客観的に見た上での行動ということになる。これを集団でおこなうことによって、助け合っている姿が見られたことから、目的は達成できたと考えている。

③ 児童同士の違いを認識した上で、相手を尊重しながら交流し、良好な関係を築き、チームで協働できるようになる。

今回カルタゲームでの説明の場面において、いろいろな手段で説明をして、相手に伝わるよう工夫したことは、相手の自分との違いを見極めながら、相手の立場に立った説明をしようとした点で、異質な集団で協力しながら行動するための第一歩が踏み出せたといえよう。外国人との異質さに気付くことを出発点として、児童同士の異質さにも気付くようになり、実際に人と関わる時、相手に伝わりやすい方法を考えたり、相手が言うことが分からない時に自分からコミュニケーションをして、分かるまでやりとりしたりという変化が見られていた。このように外国人と活動した時の経験が普段の生活の中にも活用できるようなことになったことは、大きな成果といえよう。

④ 今回の実践に限らず、課題を設定する際、児童同士の新しい組み合わせや、普段と異なる課題内容を設定すると、それまでに自然と固まっていた学級の人間関係や習慣を崩すことができるかもしれない。本実践授業の課題は、通常の授業とは異なり、英語を完全にこなせる児童はいないという状況で、協力し、助け合いながら進めていく必要があった。その中で、普段見えていなかったような積極性を見せる児童がいたことは大きな発見である。

## 2. 課題

本研究の最終目標は普段の生活の中で異質な集団で協力しあって行動することであったが、そこまでは到達できなかった。外国人との交流の中で、目に見えやすい異質さに気づき、これを克服する活動については一定の成果が得られた。また同じ日本人の児童同士でも違いがあるという気づきまでは到達できた。しかし、日本人だけの集団の中で、児童が異質さに気づき、さらにそれを乗り越えて集団で関係を築き、協力して働くというところまでは至っていない。今後は学校以外の集団で、例えば、お祭りの時、親子大会の時など、児童と市民の方と一緒に活動する場面で、他人との関係を考えてから作戦を考えるなど、生活のあらゆる場面で異質な集団で交流する能力を活用してほしいと考えており、その方策を検討していきたい。

今回の実践研究は筆者が普段から関わっている外国人団体の方に協力をお願いして実現した。こうした方法はどこでもできることではなく、一般的な小学校でどうやって活用するかは今後の課題である。この点を含めて大学院での実習を利用した特別な研究を、一般の小学校でどこまで活かせるかは今後考え続けていかなければならない。

### 参考文献・資料

- ・ ドミニク・S・ラッセン, ローラ・H・サカネ, 立田慶裕, 今西幸蔵, 岩崎久美子, 猿田祐嗣, 名取一好, 野村和, 平沢安政 (2006) 『キー・コンピテンシー—国際標準の学力を目指して』 明石書店.
- ・ 文部科学省 (2013) 「第2期教育振興基本計画」.
- ・ 森田ゆり (2000) 『多様性トレーニングガイド』 解放出版社.
- ・ 國分康孝, 國分久子 (2004) 『構成的グループエンカウンター事典』 図書文化.
- ・ 文部科学省 (2012) 『Hi, friends! 2』 東京書籍.
- ・ 岩波英和大辞典 (1970), 岩波書店.
- ・ 文部科学省 (2006) 『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』.
- ・ 文部科学省 (2006) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』.
- ・ 國分康孝, 岡田弘 (1996) 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』 図書文化社.
- ・ 俣稲慧 (2015) 実践研究報告書『児童が異質な集団で交流できる能力を育むための研究～児童同士の関係作りとチームの協働性を中心に～』 長崎大学大学院教育学研究科.